巻頭言

－帰化植物に国境はない－

(財) 日本植物調節剤研究協会　評議員
(株)全国農村教育協会　代表取締役会長　**廣田伸七**

帰化植物とはどんな植物？と改まって聞かれると返答にとまどうことがある。帰化植物の定義はいろいろあるが，要約すると意識的，無意識的であるにせよ人が持ち込んだ外来の植物が野生の状態で見いだされるものを帰化植物という，とされている。これからすると史前に農耕文化と共に入ってきたもの，或いは奈良時代などに薬用や観賞用に中国から渡来した植物なども帰化植物に入るが，現代一般的に帰化植物といわれているものは入った時代が確認できる江戸末期から明治以後に外国から入ったものを帰化植物と呼んでいる。

帰化植物がわが国に入った歴史を見てみると，明治初期の記録が20種，明治43年になると43種，大正7年で80種，昭和6年133種，それが太平洋戦争後の昭和25年になると294種，さらに昭和47年では532種，昭和51年は716種と海外との人や物資の交流が多くなるにつれて増加し平成8年では1,336種という記録がある。このように平成の時代になると日本の植生の中で帰化植物の比率が都市近郊では植生の5～6割が帰化植物だといわれている。こうしたことから帰化植物によるいろいろな影響がでてきている。

例えば昔から親しまれていた植物に関する風物詩が一変してしまった。春の風物詩では春を告げる花はアブラナが多かったが，最近の都市近郊では帰化植物のハルザキヤマガラシ，カラシナ，中にはハリゲナタネなども見られる。夏では川岸に五月節句に使われるショウブ湯のショウブ，また，お盆の墓前の供花に使われた赤い花が咲くミソハギが夏の風物詩であった。それが現代では水路や川端に大型の帰化植物クワモドキ（オオブタクサ）がわがもの顔に群落をつくっている。秋は秋で昔は有名な映画の題名にもなった「野菊の如き君なりき」のいわゆる野菊のノコンギクやユウガギクが土手や野原に咲き乱れていたが，それが今では帰化植物のセイタカアワダチソウやオオキンケイギクの黄色の花がやたらに目につくようになった。

こうした植生の変化は，映画やテレビドラマの世界でも油断すると変なことになる。時代劇の場合時代考証に注意しないととんだドジをやらかす。下町の風景や長屋の内部，小道具などは撮影所のセットで行なわれるので昔の風景だが，問題は野外のロケである。よく河川敷などで決闘場面などがでてくるが，こうした場合バックに戦後の帰化植物であるセイタカアワダチソウの黄色の花が映っていると興ざめである。あるときTBSテレビの人気番組水戸黄門を見ていたら，水戸黄門主従一行が楽しそうに山道を歩くシーンが映し出されたが，バックの土手に最近急激に各地に広がっている帰化植物のメリケンガヤツリがビッシリ生えていて違和感を覚えたことがある。これらはたとえれば時代劇の長屋の家の中にテレビや冷蔵庫があるのと同じ感覚である。時代考証担当者が気をつければこうしたチグハグなことは起こらない筈である。

しかし，風物詩にしろ，時代考証にしろ日常生活には直接影響がないので問題にならないが，これが人間生活に支障をきたすとしたら大変である。例えば数年前九州で発生した帰化植物のブラジルチドメグサはクリーク一面に繁茂し，これを除去するのに地下茎が水底の泥の中まで入り込んでいるのでこの泥まで取り除いたため莫大な費用がかかった。四国では用水取入れ口の堰に帰化植物ボタンウキクサが大繁殖し除去に多大の労力と経費を費やした。さらに昨年神奈川県の藤沢では公園の蓮池に帰化植物「アゾラ・クリスタータ」という浮草が一面に繁殖し，メダカなどの水生生物が酸欠になり，それを餌とする野鳥が来なくなる恐れがあるとして，市は多大な経費を投じて除去したというニュースも流れている。こうなると帰化植物は大害草となる。

帰化植物は最近では1年間に30種前後が新たに侵入してきているという報告もある。正に帰化植物には国境はないで大変な脅威である。